

狂気と正気

伊 藤 洋

文豪ドストエフスキー（1821～1881）にとって、生涯の「持病」であった癲癇は天の配剤の一種であって、大文学が構想できる才能の源泉であり個性である、と少なくとも当人は思っていたらしい。だから、この「持病」は本人のみならず近縁者にとっても尊敬おくあたわざるものであったという。

この癲癇は、E・クレッチュマーが名著『天才の心理学』（内村祐之訳、岩波文庫）の中で、精神病の基本形の一つとして定義したことから、すっかりその地位を下落させられてしまった。まことに、クレッチュマーが本書を著した時代こそ、「精神病」というものが人々の意識上に「発見」された画期だったのである。つまり、それ以前なら尊敬さるべき「個性」であったものが、「精神病」という狂気として位置づけられたのであり、「正気」と「狂気」が二元論的位置づけをなされるようになった時代なのである。

「狂気」と「正気」が、ちょうど「病気」と「健康」と同様に分化されたのは、近代化のために必然であった。すなわち、近代の工場における流れ作業、フォードの提唱する分業化においては、人間は「役に立つ者」と「立たない者」に二分され、一般に病弱者は無用の長物と化したのである。すなわち、「精神病者」とは、流れ作業の近代的工場における協働作業を邪魔する非能率の謂いだったのである。

これはあたかも、近代における植民地主義・帝国主義戦争における、徴兵検査不合格者の役立たずぶりと好一対をなすものであった。それゆえ、近代を象徴するものとして「癲狂院」と「病院」は屹立しているのである。

個人の「特性」であった精神的「特徴」を、「精神病」として差別化に成功した近代社会は、しかし自らが「狂気」に支配されるようになってしまった。あの荒々しい領土・市場強奪のための帝国主義戦争は、そういう政府を支持する「国民」を集団的に「狂気」に導く巨大な舞台装置だったのである。先の大戦中の日本人の精神構造を正気と思う人がいないのと同様に、ベトナムのジャングルを枯葉剤で殲滅しようとしてまで考えたアメリカ人を正常と思う人も居ないだろう。首領「総書記」に熱狂する朝鮮民主主義人民共和国の人々も、9.11に過剰に反応して二つの国家を殲滅した米国の人々も、どうみても「正気」ではない。それでいて、彼ら自身は「正気」だと自認し、夫々の政府に異を唱える隣人がいれば、「狂気」として断罪されるべきだと、政府に同調するに違いない。「狂気」とはそういうものなのである。

『天才たちの午後』の役者たちは、上記古典的な意味で実に「個性的」である。それは、彼らにとって「正気」と「狂気」が二元論的に対立する概念となっていないからにちがいない。